

留学生別科におけるイマーシジョンプログラムの可能性 「日本の就職事情」をトピックにして

佐々木 技 好*, 吉 田 晃 高*

The Potential of Immersion Programs in “Ryugakusei Bekka”
Japanese Language Course for International Students:
Using the Job Search Situation in Japan as the Topic

Ayako Sasaki *, Akitaka Yoshida *

Received October 31, 2002

1. はじめに

北陸大学留学生別科（以下、別科）は主に進学を目的とする学習者のためのコースであり、修了生の多くは日本国内の大学、大学院に進学する。これまで別科では毎年1月にインタビュープロジェクトを始めとする各種プロジェクト⁽¹⁾を行ってきた。その目的は12月までに学んできた「読む」「聞く」「書く」「話す」という4技能を統合し、総合的な日本語能力を高め、進学に備えることである。また毎年12月の日本語能力試験終了後、学習者たちのモチベーションが減退し、授業の雰囲気が非常に停滞するという問題を抱えており、それを何とか打破したいという事情もあった。2002年1月にはそれまでのプロジェクトを発展させる形で「日本の就職事情」をトピックにした3週間の日本語イマーシジョンプログラムを行った。今回の取り組みは、これまで別科で行ってきたプロジェクトワークの成果だけでなく、新しくイマーシジョンプログラムの実践、研究成果を取り入れる形で計画されたものである。

2. 別科におけるイマーシジョンプログラムとそのデザイン

イマーシジョンとは「学習者が体系的に日本語による日本語以外の科目の授業に浸りきる」というプログラムである⁽²⁾。これはカナダの学校教育から始まったもので、子どもたちが第2言語を通して数学や理科などの科目を学ぶ、つまり第2言語そのものを学ぶのではなく、第2言語を使って別の科目を学ぶというものである。そこには言語を媒介にして何かを学ぶという目標と、その目標に向けた教師と子どもたちの本物のコミュニケーションがあり、その結果、第2言語が獲得されていくと考えられている。

これを大人への言語教育に応用したものが、Miyazaki (1991) 等で報告されているイマーシジョンプログラムである。大人に対するイマーシジョンプログラムでは学習者が学びたいと思う

* 留学生別科
Japanese Language Course

ようなトピックと、学ぶために必要となる日本人との接触場面が用意される。

Miyazaki (1991) によるとイマーシオンプログラムの最終的な目標は、学習者が接触場面でインターアクション能力を獲得するよう手助けすることにある。そのためにインターアクションをするさまざまな機会を学習者に与えることがイマーシオンの特徴になっている。例えば、ネウストプニー (1995) は講義やパネルディスカッション、ビジターセッション、クラスディスカッション、日本人の家庭訪問、インタビュー (プロジェクトワーク) などを挙げている。しかしイマーシオンの中には、もちろんインターアクションだけではなく普通の語学授業も含まれていて、文法能力などの獲得も決して軽視するわけではない。

では、イマーシオンに参加した学習者たちはどのように感じているのだろうか。

Miyazaki (1991) はイマーシオンプログラムに参加した学習者たちが日本人や日本社会との接触を面白く有益であると感じていて、学習者のモチベーションを高めると指摘している。

またやはり宮崎 (1999) は早稲田大学で行われたサマープログラムにおいて、プログラム終了後に学習者に4技能においてどれくらい上達したかを自己評価させるアンケート調査を行ったところ、イマーシオンプログラムがサマープログラムに含まれていた時と含まれていなかった時を比較すると、全ての技能においてイマーシオンプログラムが含まれていた時のほうが高い数値を示したと指摘している。このアンケートは同一の学習者に対して行われたものではないものの、イマーシオンに対する学習者の評価が肯定的であることは確かであろう。

そこで、別科においても、これまで日本語教育で行われてきたイマーシオンプログラムの実践、研究の成果を取り入れ、別科におけるプロジェクトを一新することにした。その際、今まで以上に進学を見据えた日本語能力を身に付けてもらおうと、日本人とのインターアクションの活動を多様化、その数を増やし、さらに新しい試みとして「自己再発見の機会」を提供し、人間的成長をも視野に入れるものとした。

本別科におけるイマーシオンプログラムをデザインする際に、念頭に置いたことは次の3点である。

日本事情を学ぶ

「日本の就職事情」と題し、大学生の就職活動についての流れや就職事情を通して日本における大学生の学生生活、大学の様子、日本企業の特徴などを認識する。

自己再発見をする

「日本の就職事情」を学ぶ過程で、日本人大学生の就職活動を模擬体験し、自己分析し自己再発見をする機会を与える。別科修了後の将来 (進学・就職) にも結び付けて考え、進学後の勉学にもモチベーションを持たせる。

総合的な日本語力を養成する

「読む」「聞く」「書く」「話す」という4技能別のクラスから離れ、それらを総合的に用いることができるようにし、また進学後に必要となる調査能力、発表・報告能力の獲得を目指す。さらに、日本人との多様な接触場面を用意しインターアクション能力を高める。

当然、別科であるからには ①の総合的な日本語力の養成が大きな目的であるが、これを前面に出すのではなく、学習者にとっては ②の日本事情を学ぶことや ③の自己再発見することが目

前の目的となるようなデザインを心がけた。

3. 別科におけるイマージョンプログラムと学習活動

3.1. イマージョンプログラムの実施概要

別科生（2001年度，3クラス，47名）を対象とし，2002年1月9日（水）より1月29日（火），約3週間にわたって行われた。Aクラスは初級レベル，Bクラスは初中級～中級レベル，Cクラスは中上級～上級レベルである。別科では，来日時にプレースメントテストを行い，その結果をもとに3クラスに分かれ授業を受ける。夏休み明けに学習者のクラス移動が若干あるが，イマージョンプログラム（以下，プログラム）は移動後である後期のクラスにて行われた。

また，別科全ての教員が担当する形をとらず，日本語4科目（「文型・読解」「作文」「会話・聴解」「総合演習」）のうち筆者が担当する科目においてのみ行われた。Aクラスのみ総コマ数が他の2クラスと比べて多いのは日本語能力に配慮したためである。表1に，プログラムにおけるクラス概要を示す。またクラスレベルを客観的に示すために2001年度日本語能力試験の合格者数も示しておく。

表1）プログラムにおけるクラス概要

クラス		Aクラス	Bクラス	Cクラス
人数		14	17	16
国籍（人数）		中国（12）・韓国（1） バングラデシュ（1）	中国（17）	中国（15）・韓国（1）
授業 （担当者）		会話・聴解/総合演習 （佐々木）（吉田）	会話・聴解 （吉田）	総合演習 （佐々木）
コマ数（週あたり） （1コマ60分）		8（各4）	4	4
総コマ数		23	12	11
日本語能力試験 （2001年度） 合格者数 （-は受験者なし）	1級	3	12	16
	2級	1	-	-
	3級	1	-	-

3.2. イマージョンプログラムの流れと各学習活動および内容について

クラスのレベル，時間数に応じてクラスごとに活動内容が若干異なるが，ここでは時間数の多かったAクラスを例にあげ，学習活動および内容について述べる。Aクラスにおいては全23コマで行われ，その流れは表2で示したとおりである。

今回のプログラムで行った各学習活動およびその内容は大きく3つに分けられる。A）講義とそれに関わる活動，B）就職活動模擬体験と題された活動，C）インタビュー・報告会・発表会に関する活動である。

表2)「日本の就職事情」 Aクラスにおけるプログラムの流れ

コマ (1コマ60分)	学習活動・内容
1～2	就職活動紹介 就職活動模擬体験 適正診断テスト
3	講義A 準備
4	講義A「求められる人材」 I-O DATA 管理部人事課課長 山本均氏 質疑応答
5	講義Aの感想・確認・復習クイズ
6	就職活動模擬体験 職種調査(インターネットを使つての調査)
7	スピーチ:「職種について」
8	就職活動模擬体験 会社募集記事を読む
9	講義B 準備
10	講義B「大学生の就職活動」 元就職指導課課長 堀口英則氏 質疑応答
11	講義Bの感想・確認・復習クイズ 就職活動模擬体験 - 1 面接(準備):身だしなみについて
12	就職活動模擬体験 - 2 面接(準備):自己PR,志望理由などの作成
13	留学生による就職活動体験記を読む 就職活動模擬体験 - 3 面接(練習):ロールプレイ
14	就職活動模擬体験 - 4 面接(実践):ゲストによる面接
15	日本人学生へのインタビュー(準備)
16	日本人学生へのインタビュー(実践)
17	インタビュー報告(準備) レジюме作成
18	インタビュー報告(準備) 口頭発表練習 就職活動模擬体験 企業へ電話をかける:ロールプレイ
19	日本人学生へのインタビュー 報告会
20～21	ハローワーク金沢見学 講義C「中途採用・失業の現況」 ハローワーク金沢 職員 松本氏 質疑応答
22	講義Cの感想・確認・復習クイズ 「適正診断テスト」のフィードバック
23	「自分の適正職種と進路」発表会

A) 講義について

ここでいう講義とはいわゆる日本語のクラスのことではなく、ゲストによる就職事情に関する

る講義のことであり、計3講義を用意した。予め講義理解に必要な事柄（語彙導入、グラフ・図の見方など）については導入済みである。また講義はビデオに録画し、終了後、内容確認を行う。また感想を発表し、復習クイズを実施する。復習クイズは学習者への評価の対象となる。

講義A「求められる人材」：

企業の人事課の方をゲストに迎え、「実際に企業が求めている人材はどのような人間なのか」を講義していただいた。将来就職を意識した大学生活を考えるきっかけとなることをねらったものである。大学に入学した時点で就職活動がスタートしていることを確認する。

講義B「大学生の就職活動」：

日本人学生の就職事情を知るといふねらいで、本学元就職指導課課長（現国際交流センター課長）をゲストに迎えての講義である。これにより現在の就職環境や新卒学生就職率の推移、就職活動の流れなどの詳細な情報を得ることで、なぜ就職難といわれているのかを理解することができる。日本人学生へのインタビューにも直接つながる講義である。

講義C「中途採用・失業の現況」：

公的機関であるハローワーク金沢を訪問し、職員の方から「中途採用」、「失業の現況」、「地域におけるハローワークの役割」について講義を受けることで、新卒者だけでなく、既卒者の就職活動についても考えるのがねらいである。また日本社会において外国籍の者が就職する際に、望まれる職種、人物像などについても考えるきっかけとなる講義である。中途採用情報など同所にてコンピュータを検索し、情報収集能力を育成しつつ、実際にどのような職業があるのか調査することでハローワークの社会的役割を認識する。

B) 就職活動模擬体験について

就職活動において行われる最も基本的な活動を5つ選び、学習者が模擬体験することを通して、各自の日本語能力を振り返り、また自己分析が行えるように配慮した。

適正診断テスト

このテスト⁽³⁾は日本人学生のために開発され、行われるものであるが、それを用いることで、日本人学生の就職活動を模擬体験すると同時に、自分自身を知るといふのがねらいである。このテストの結果から選職志向（自分の職業への興味の方向性）、性格の傾向の二つを各自で検討させ最後にレポートさせる。

なおCクラスでは適正診断テスト以外に本学学部3年生に配られる『自己分析シート2002』を利用し、「自己分析シート」も作成した。

職種調査（インターネットを使つての調査）

目的は、さまざまな職種があることを知り、またコンピュータを使って情報を入手する方法を学ぶことである。インターネットの就職活動関連のホームページ⁽⁴⁾を利用し、自分の興味のある職種を検索させ、それぞれが選んだ職種の内容を紹介するスピーチへとつなげる。

会社募集記事を読む

『2002年外国人留学生のための就職情報』((財)内外学生センター)より「留学生採用予定企業案内」をとりあげ、企業紹介・PR文、応募資格、採用状況と条件、応募の方法など、必要な情報を読み取る力を養成する。

面接(身だしなみ、マナーを含む)

面接の際、「入室して数秒でその人の印象が決まる」とよく言われるが、印象が面接でどのくらい重要なのかを知るために、就職活動の際の身だしなみについて話し合う。日本人が好ましいとする身だしなみでもあることを理解したうえで、学習者がお互いに「身だしなみチェック」リストを用い確認を行う。

また面接におけるマナーを理解し、実際に練習することで体得する。志望業種を決めた上での面接という想定で行うが、質問項目は進学に必要な面接試験とほぼ変わらない内容である。

まず、面接官役と面接を受ける学生役として、元就職指導課課長および日本人学生(大学4年生、企業に内定済み)をゲストとして迎えモデルを示した。

面接(実践)では学習者に予め質問予想をさせ、それについての必要最低限の準備をさせたうえで実施した。時間の制約があるため、グループ面接で行うが、入退室は一人一人行う。面接担当者は担当教員、および元就職指導課課長、そして学習者の全く知らない就職指導課職員の計3名である。緊張せず、初対面の人とも丁寧に、まとめて自分の言いたいことを言うことができるかがポイントである。

企業へ電話をかける(ロールプレイ)

電話での会話については、本学で使用されている『就職ガイドブック2002』をもとに電話のマナー、敬語の使い方などを中心に学び、企業に電話をかけるロールプレイを行う。

C) インタビュー・報告会・発表会について

インタビュー、報告会、発表会という実際に日本語を話す場面を提供し、口頭能力の向上とレジュメ作成能力の育成を図った。

日本人学生へのインタビューおよびその報告会

企業から内定をもらった日本人学生(大学4年生)を招き、グループ(日本人学生1名に対し、別科生3~4名)でインタビューさせる。日本の就職事情、就職活動の流れ等は既に講義などで導入されており、知識の面では日本人学生と同等の立場といえる。講義で学んだことについて、確認のための質問も含めて日本人学生にインタビューを行う。グループによっては、実際の苦労話など講義では聴けなかった話も交えて行われたと思われる。日本人学生と話すことのほとんどない別科生にとってはまたとない機会である。

インタビュー報告会にむけて、「報告」の流れ、用いられる文型、レジュメの書き方などを解説し、報告文を作成する。インタビューはグループで行ったが、発表は個人で行われた。ビデオに録画し、どこがよかったか学習者同士が互いに質問やコメントをし合い、最後に教

師がコメントする形をとった。

「自分の適正職種と進路」発表会

適性診断テストの結果に基づき、自分がどのような性格であり、どのような職業に向いているかについて、自分の予想と実際の結果との比較、また卒業後に就こうとしていた職業との異同をもとに結果を発表し、今回のプログラムのまとめとする。

4. プログラムに対する学習者の評価

プログラム終了後、学習者にアンケート調査を実施した。各活動について5段階（5 = 大変良い・4 = 良い・3 = 普通・2 = あまり良くない・1 = 良くない）で評価させ、コメントも求めた。さらに、プログラム全体に対するコメントも求めた。以下、まず各活動に対する評価とその結果判明した各クラスの評価の特徴を述べ、さらにプログラム全体に対する評価を分析する。

表3) 各活動に対するクラス毎の評価の平均値（5段階評価）

活 動	A	B	C
適性診断テスト	4.6	4.6	4.5
自己分析シート記入			3.8
講義A（企業人事課課長）	3.9	4.2	4.3
コンピュータ職種検索	4.3	3.9	4.2
職種スピーチ	4.2		
講義B（北陸大学元就職指導課課長）	4.1	4.0	4.4
企業への電話練習	3.8		4.6
面接練習（就職指導課職員）	4.3	-(5)	4.7
日本人学生へのインタビュー	4.1	3.8	4.1
インタビュー発表会	4.5		4.1
ハローワーク見学・講義C（ハローワーク職員）	4.2	4.1	3.9
討論			4.1
自分の適性と進路について発表	4.2		

斜線は、そのクラスではその活動が行われなかったためにアンケート調査がなかったことを意味する。

4.1. 各活動に対する評価

今回のプログラムにおける活動の中からいくつかを取りあげ、その評価を分析する。

適性診断テスト

適性診断テストは4.5～4.6でクラスを問わず評価が高い。テストを受けてから約3週間後に返却された診断結果が興味をひいたようである。「結果を見ると参考になる。自分の考えと同じだから、自信をもらえる。違っても考え直すことになる可能性がある」（原文のまま、

以下同様)というコメントがあるように、自己分析の材料を得たことで、テストの意義も理解できたと思われる。

しかし、特にAクラス、Bクラスではテストで用いられる日本語が難しいこと、また限られた時間内で大量の質問に答えなければならないことから、教師が読み上げて説明するなどかなりのフォローが必要となり、教師、学習者双方への負担が大きいのとなった。「よい活動けれども私にとって時間が足りないので正確に答えられませんでした」というコメントが見られたのはそのためと考えられる。また「別科から修了したあとで、大学に入る。就職ではない。テストは必要ではないです」というようにテストの意義を感じられない学習者もいた。

自己分析シート

Cクラスのみ、本学就職指導課制作の「自己分析シート2002」を利用して自己分析を行った。日本語の作文力をつけながら、自分を振り返る機会を与えたかったのだが、これについては表3のとおり3.8と他の活動に比べて低い評価になっており、「つまらない」というコメントもみられる。しかし一方で「いままでそういうふうに真剣に自分のことを考えたことはなかった。これから自分が成長していく上に大変役立つと思う」というものもあり、教師側の意図を感じ取ってくれた学習者もいる。

講義A、講義B、講義C

ゲストあるいは訪問先の方による講義を3つ行った。特にAクラスの日本語力を考えると講義が理解できるか心配したが、講義後に行ったテストの結果からどのクラスの学習者も概ね講義を理解していたことが分かった。そのAクラスでは講義A3.9、講義B4.1、講義C4.2という評価で、まずまずの評価と言ってよいだろう。

Cクラスではハローワークの講義Cを除いて講義への評価が高い(講義A4.3、講義B4.4、講義C3.9)。これは日本語力とも関係しているだろう。Bクラスでは講義A4.2、講義B4.0、講義C4.1という評価で、コメントでは講義Bに触れる者が多い。「初めて近く日本のサラリーマンとあいました」というコメントがあり、普段学校という場所で過ごす学習者にとってはかなり新鮮だったようである。また、「日本企業の求人動向がよくわかりました」「将来のために何をしますか、とわかりました」というコメントから、講義で知識を得ただけでなく、自分自身に照らし合わせて考えていることがわかる。一方で「おもしろくないと思います」とコメントしたものもいたが、これは講義という形式が嫌なのであって「個人的な原因です」と理由を述べている。

面接練習

面接練習はAクラスで4.3、Cクラスで4.7と評価が高く、その理由としては、面接指導のプロ(就職指導課の現・元職員の方々)および就職試験を勝ち抜いてきた被面接者のプロ(日本人大学生4年生)がクラスに参加したことが大きいと考えられる。面接のモデルを見ることができ、さらに実際に面接練習を行うことで、日本での面接のマナーと面接で使われる日本語を学習することができるからであろう。

「面接とかに本当に参加したような雰囲気の中で自分で直接経験してみながら、まちがったところとかも直すことができるようになって本当によかった」「就職の時、そして入学面接の時、とても役にたつ」「礼儀を学びました」というようなコメントがあり、実践的に学べたことが高い評価につながっている。

日本人学生へのインタビュー

直接日本人学生（大学4年生）の話が聞けるということで評価はかなり高くなると予想したが、実際には3クラスで3.8～4.1と他の活動と比べて高いとは言えない。個々の評価を見ても、評価が完全に分かれたことが読み取れる。

Aクラスの学習者の中には否定的なコメントはなく、「学生と一緒に話して、直接に就職についていろいろなことを教えてもらってよかった」「就職の具体内容を了解することができます」などと知りたいことを聞くことができ満足したようである。

しかし、Bクラス、Cクラスでは「日本の学生の実況を知りました」「日本の若者の意識、考え方が分かる」と肯定的な評価をする学習者がいる一方で、厳しいコメントを述べるものもいた。「自分とインタビューをされた学生の生活信条はちょっと違うから。（中略）法学検定に参加しなかったのはとても残念と思う」「大学で取り組むことはと聞いたら、夜から朝まで友達と遊んでお風呂に入るだけで、そのまま学校に行き、とにかく友達を作ることです、という回答がかえってきたことにはびっくりしました」というコメントからは、目的や目標をもって学ぼうとしている留学生が、法学部の学生なのに法学検定を受けようとしていない日本人学生や、勉強については一言も言及しない日本人学生に対して失望を感じたことが窺われる。

インタビュー報告会

AクラスとCクラスで行ったインタビュー報告会について、Aクラスで4.5と評価が高めであるのは、「インタビューをまとめて、感想を書く、書く与会話の能力を磨きできます」というコメントからもわかるように、クラスで報告するという自分たちの実力よりやや上の技術を要求され、その技術を学び日本語の力がまた一歩進んだという満足感があったからだと思われる。

一方Cクラスでは4.1でまずまずの評価ではあるが、「あまりまじめに言う学生がなかったので、聞く側は勉強にならないと思います。もっと言葉の表現力をきびしく要求した方が良かったと思います」という意見もあった。これはコマ数の関係で報告会前の準備時間が足りず、報告会で使う日本語表現で難しいものを導入したり練習したりすることが少なかったせいであろう。

4.2. 各クラスの評価の特徴

Aクラスでは各活動に対するコメントに、「会話を練習できます」「インタビュー発表は書く与会話の能力を磨きできます」「面接練習とスピーチとが会話の練習、日本語に対してよかった」などというものが目立つ。これらの活動を通じて、日本語を学ぶことができたと感じていることが分かる。Aクラスのレベルでは授業以外になかなか日本人と内容のある話をするチャ

ンスがなく、授業では会話練習をしているといっても作られた設定のロールプレイなどで、真のインターアクションはなかなか行われていない。いかにAクラスの学習者たちがこういった本物のインターアクションに飢えているかということが分かる。

一方Bクラスでは既にある程度の日本語力があるためか、Aクラスのように日本語に関して言及する学生はおらず、内容に触れるコメントが多い。例えば適正診断テストについては「自分をよく知ることは難しく、なくてはならないものと思います。進学や就職などに役に立ちます」、また職種検索では「大学を卒業する後で就職する分野が分かりました。いまから将来の就職のために大学の専門から頑張ります」などである。

CクラスでもBクラスと同様、内容に触れるコメントが多いが、面接練習と企業への電話練習で、生きた敬語の使い方やマナーを学んだことにも多くの学習者が言及していた。「敬語の使い方、ふだん気付かなかった自分の話し言葉のくせなどに気付き、とてもいい勉強になりました」などがその例である。

4.3. プログラム全体に対する評価

プログラム全体に対するコメントを見てみると、「いま日本の会社や日本の学生やいろいろな面から就職の情報と考え方をわかるようになりました」というように、日本事情としての就職事情を理解したこと、「自分を分析できたし、これからどう頑張ったらいいかが分かりました」と自己を振り返ることができたこと、「将来自分就職するに役に立ちます」「大学の入学面接とかやくにたちます」というように実用的、実際的で役に立ったということ、これら3点に集約される。今回のプログラムをデザインした際に目指した、「日本事情を学ぶ」「自己再発見をする」は達成されたと言える。また実用的、実際的で役に立ったということは、学習者のモチベーションを高められたことを意味し、積極的にこのプログラムに参加したことが読み取れる。また「おもしろかった」「もっとそんな勉強が多ければよい」というような感想もあり、プログラムは肯定的に評価されたと見てよいだろう。

ただし、「ちょっとはよかった」(1名)「具体性はちょっと強くしてほしいです。理論的な内容が多くて、実践的な内容はちょっと少ないと思います」(1名)という意見があった。クラスによっては時間数が足りないことから、各活動前の準備(例えば講義を聞く前には、講義に出てくる単語を予習する、インタビューをする前にはインタビューの内容を考えるなど)が十分とは言えないこともあり、そのように感じた学習者がいたのかもしれない。

5. 今後の課題

今回のプログラムでは、レベルの違う3クラスの学習者を対象にクラス別に授業を行う一方で、ゲストによる講義やハローワーク見学などは3クラスが一斉に参加するという形を取った。また、通常の授業の時間割を変えずに、筆者二人の担当する平常の授業科目を利用してプログラムの時間を組んだ。そのために、クラスによっては十分な時間を確保できず、講義やインタビューといった各活動をする前の準備が足りなかったり、インタビュー報告会のためのレポート作成時間が少なかったりするということもあった。レベル差を埋めるための時間数の確保と、3クラスが合同で行う講義、見学等の時間調整をさらに工夫していく必要がある。

また、Aクラスにおいては、「日本人学生へのインタビュー」の後に行った「インタビュー

報告会」のためのレジメを作成したが、時間の制約上Bクラス、Cクラスではレジメのように形に残り、まとめとなる「制作品」を作ることができなかった。「制作品」があれば学生は達成感を感じ、別科での勉強のまとめともなったであろう。今後は時間を調整しながら、クラスのレベルに応じ、それぞれの学生が興味を持って取り組んで「制作品」を作れるような課題を考える必要がある。

これらを課題として、別科におけるイマーシオンプログラムをよりよいものとし、学生たちの期待に応えられるよう今後も努力していきたいと考えている。

付 記

「日本の就職事情」実施にあたっては(株)I-O DATA機器山本氏、ハローワーク金沢松本氏および職員の方々、本学就職指導課萩原氏、茂登氏、国際交流センター堀口氏の協力を得ました。心より感謝いたします。

注

- (1) 1999年より「北陸大学職員インタビュー」、「初めての人のための『金沢案内』」などを実施した。前者は本学で働く職員に担当の業務内容を聞き、大学内のシステム、用いられる言葉を知り、進学後の生活が円滑となるようさまざまな情報を得ることが目的である。後者は海外から金沢に初めてやってくる人々に対して交通手段、観光地、宿泊などについて日本語でアドバイスするというものである。
- (2) ネウストブニー(1995), p.76。
- (3) 適正診断テストは進研アド IPU CorporationのCareer Focus(キャリアフォーカス)を利用した。その結果、6つの診断がなされる。選職志向性(自分の職業への興味の方向性)、適正職種群(自分の強みを生かせる分野について)、就職準備度(就職準備の進み具合)、就職への考え方と行動のレベル)、性格の傾向、社会的強み(社会人としての態度、強み)、能力の強み(実務的な能力の強み)である。今回はこの診断結果を重視して取り上げた。
- (4) (株)リクルートによる就職情報サイト「リクルートナビ」<http://www.recruitnavi.com>である。
- (5) Bクラスにおいては面接練習終了後、学生一人一人にコメントし、その際、口頭でアンケートをとったため「各活動に対する評価の平均値」としてデータ化できていない。しかし、学生からの評価は高いものであった。

参考文献

- (1) 岡崎敏雄, 岡崎眸(1990)『日本語教育におけるコミュニケーションアプローチ』凡人社
- (2) 久保田美子, 八木敦子(1999)「マルチメディアを利用したプロジェクトワーク 海外日本語教師長期研修における試み」『日本語国際センター紀要』第9号 pp.55-68
- (3) 倉八順子(1992)「プロジェクトワークが学習者の学習意欲及び学習者の意識・態度に及ぼす効果(1)」『日本語教育』80号 pp.49-61
- (4) (1994)「プロジェクトワークが学習成果に及ぼす効果と学習者の適正との関連」『日本語教育』83号 pp.136-147
- (5) 佐藤恵美(2001)「面接試験の受け方の指導 ビジネスクラスでの試み」『南山大学国際教育センター紀要』南山大学国際教育センター第2号 pp.100-110
- (6) 田中幸子, 猪崎保子, 工藤節子(1988)「コミュニケーション重視の学習活動1 プロジェクトワーク」凡人社
- (7) ネウストブニー, J.V.(1995)『新しい日本語教育のために』大修館書店
- (8) 藤原雅憲, 初山洋介(1997)『上級日本語教育の方法 さまざまなアプローチ』凡人社
- (9) 宮崎里司(1999)「インターアクション能力の習得を目指したイマーシオンプログラム: 98年度早稲田・オレゴンプログラムでの試み」『講座日本語教育』第34分冊 早稲田大学日本語研究教育センター pp.197-211

- (10) Miyazaki, S. (1991) "Japanese immersion programs at tertiary level: Significance in interactive teaching". *Japan and the world*, vol.3, pp.175-181, Canberra: Australia-Japan Reseach Center.
- (11) 山下早代子 , 小川小百合 (1994) 『インタビュープロジェクト 日本人の価値観発見』くろしお出版

今回のイマージョンプログラムで用いた資料等 :

- (1) (財) 内外学生センター (2002) 『2002年外国人留学生のための就職情報』内外学生センター
- (2) 成田信市 (2001) 『CAREER FOCUS GUIDE BOOK』進研アド IPU Corporation
- (3) 北陸大学就職指導課 (2001) 『就職ガイドブック2002』北陸大学就職指導課
- (4) (2001) 『自己分析シート2002』北陸大学就職指導課